

苦しみの中で耳が開かれる

ヨブ記 36 章 1-33 節

はじめに

月の第四週に私が説教をさせていただく時には、旧約聖書の「ヨブ記」からお話することにしていきます。今日は 36 章から学びたいと思いますが、久しぶりに「ヨブ記」を学ぶので、少し振り返ってみましょう。

1. ヨブの試練と信仰

ヨブは、誠実な心を持っていて、神様を愛し悪から遠ざかっている人でした。神様は、そんなヨブを祝福して、多くの財産と多くの子どもを与えられました。

しかしそんなヨブに、サタンが目を留めて、神様にこう言うのです。「ヨブは、あなたに祝福されて、多くの財産と多くの子どもに恵まれているから、あなたを愛しているに過ぎません。もし財産と子どもを失えば、きっとあなたへの信仰を捨てるに違いありません」。

そこで神様はサタンに、ヨブの財産と子どもを奪うことを許可しました。するとヨブは、犯罪や自然災害に巻き込まれて、一日のうちにすべての財産と子どもを失ってしまうのです。

しかしヨブは、そのような試練の中でも、決して神様への信仰を捨てませんでした。彼は、神様を礼拝してこう言うのです。「**私は裸で母の胎から出て来た。また裸でかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな**」(ヨブ記 1:21)。

するとサタンはもう一度、神様にこう言うのです。「ヨブは、財産と子どもを奪われても、健康に恵まれているから、あなたを愛しているのです。もし健康を失えば、きっとあなたへの信仰を捨てるに違いありません」。

そこで神様はサタンに、ヨブの健康を奪うことを許可しました。するとヨブは、足の裏から頭のとっぺんまで、悪性の腫物で侵されるのです。夜眠れないほどの痛みがあり、やせ細っていきます。内臓も侵され、それが原因で体から悪臭が出るようになりました。そのため、人々からも避けられ、ゴミのように扱われます。そして妻からも、「**神を呪って死になさい**」(ヨブ記 2:9)と見捨てられます。

しかしヨブは、そのような試練が続く中でも、決して神様への信仰を捨てませんでした。彼は、妻に向かってこう言うのです。「**あなたは、どこかの愚かな女が言うようなことを言っている。私たちは幸いを神から受けるのだから、わざわざいをも受けるべきではないか**」(ヨブ記 2:10)。

ヨブは、財産を失い、子どもを失い、健康も失い、妻からも見捨てられてもなお、神様への信仰を捨てなかったのです。これがヨブの信仰です。

2. 三人の友人たちによる「因果応報」による災いの解釈

ヨブには、三人の友人がいました。エリファズ、ビルダデ、ツォファルの三人です。彼らは、ヨブが災いの中で苦しんでいると聞いて、ヨブを慰めるために駆けつけて来ました。彼らは最初、ただヨブのために涙を流し、一週間、一言も語らずに、ヨブのそばに寄り添い続けたのです。

しかし三人の友人たちは、ヨブと会話を交わし始めると、次第に態度が変わっていきます。ヨブ記は全部で 42 章ありますが、3-27 章までがヨブと三人の友人たちとの討論の内容が書かれています。その討論のテーマは、ヨブの災いの原因は何かというものです。

三人の友人たちは、ヨブの災いの原因を「因果応報」の原理で解釈して、ヨブを教え導こうとします。「因果応報」とは、人は必ず自分の行いによって報いを受けるというものです。三人の友人たちは、ヨブの災いの原因は、ヨブの罪にあると考えます。ヨブが何か大きな罪を犯しているから、このような大きな災いに遭っているのだと考えたのです。だからもし、ヨブが自分の罪を認めて神様に悔い改めるなら、災いは終わり、神様の祝福を取り戻せるはずだとヨブを教え導こうとするのです。

3. ヨブの問題点

しかしヨブは、三人の友人たちの考えに納得できないのです。ヨブは神様に愛され、自分も神様を愛し、そして隣人をも愛してきたのです。ヨブには、このような大きな災いを受けなければならないほどの大きな罪があるとは、どうしても思えなかったのです。もちろんヨブには全く罪がなく、完璧な人間だったわけではありません。ヨブも私たちと同じ人間ですから、確かに罪がありました。しかしヨブは、自分の罪を神様に隠すことなく、神様の前に告白し、赦しを求めたのです。そして贖い主に頼り、いけにえも献げて、罪の贖いをしてきたのです。神様からも、「**彼のように、誠実で直ぐな心を持ち、神を恐れて悪から遠ざかっている者は、地上には一人もいない**」(ヨブ記 1:8)と言われるほど、ヨブと神様との関係には問題はなかったのです。

それなのに突然、神様との親しい交わりを失い、祝福された人生を失い、大きな苦しみに襲われ、孤独と絶望のどん底に突き落とされたのです。ヨブは、神様とサタンとのやり取りを知りません。ですから、神様がなぜ自分をこんな目に遭わせるのか、なぜ神様が沈黙を守っているのか、なぜ御手を動かしてくださらないのかが分からないのです。

ヨブは、神様の沈黙があまりにも長く続くので、次第に神様に対して不信感を持つようになっていったのです。自分は正しく歩んでいるのに、神様が私に正しく関わってくださらない、そうしてヨブは、神様がおかしい、神様が間違っていると考えようになり、ついには、神様よりも自分のほうが正しいと考えるようになっていったのです。

そのような中で、ヨブの前に「エリフ」という人物が現れます。エリフは、ヨブと三人の友人たちとの討論をずっと聞いていました。しかしずっと聞いている中で、エリフは段々と

怒りを覚えてきたのです。それは、ヨブが神様よりも自分のほうが正しいと考えるようになったからです。そうしてエリフは、32-27章まで、ヨブと三人の友人たちに向かって言葉を語るのです。

これまでヨブと三人の友人たちの討論は、交互に言葉を交わしていきましたが、エリフは32-37章まで語りっ放しです。誰もエリフの言葉に口を挟むことができないのです。今日の聖書箇所 1-4節でも、エリフはこう言います。「**エリフはさらに続けて言った。しばらく待て。あなたに示そう。まだ神のために言い分があるからだ。私は遠くから私の意見を持って来て、私の造り主に義を返そう。まことに、私の言い分は偽りではない。知識の完全な方が、あなたのそばにおられるのだ**」。エリフはヨブに、もうしばらく待って、自分の言い分を聞いてほしいと言います。自分の言い分は、神様から与えられたもので、自分は神様に代わってあなたに語るからだと言うのです。

4. 苦しみの中で神は語られる

では、36章でエリフは何を語るのでしょうか。7節には、こうあります。「**神は正しい者から目を離さず、彼らを王座にある王たちとともに、永遠に座に着かせる。こうして彼らは高くなる**」。神様は正しい人にいつも目を留めて、彼らを高くし祝福されると言うのです。正しい人とは、神様を信じ、従う人のことです。旧約聖書のハバクク2：4に、「**正しい人はその信仰によって生きる**」とある通りです。聖書では、信仰によって生きる人を「正しい人」と呼ぶのです。

8-12節でエリフは、その「正しい人」が苦しみに遭う時の意味について語っています。「**もし、彼らが鎖で縛られ、苦しみの縄に捕らえられたら、神は彼らの行いを彼らに告げられる。彼らの背きを。彼らがおごり高ぶったからである。神は彼らの耳を開いて戒め、不法から立ち返るように命じる。もし彼らが聞き入れて神に仕えるなら、彼らは自分の日々を幸せのうちに、自分の年々を楽しみの中に全うする。しかし、もし聞き入れなければ、彼らは槍によって滅び、知識のないまま息絶える**」。エリフはここで、「正しい人」が苦しみに遭う時の意味について語っていますが、実際にはヨブが苦しみに遭っていることの意味について語っているのです。ヨブがなぜ苦しみに遭っているのか、それはヨブが神様に背き、おごり高ぶっているからだと言うのです。そして神様はこの苦しみを通して、ヨブを戒め、悔い改めを求めているのだと言うのです。つまり神様は、苦しみを通してヨブに語りかけているのだと言うのです。もしヨブが神様の語りかけを聞き入れれば、幸せの人生を送るが、もしヨブが神様の語りかけを聞き入れなければ、その人生は滅びると言うのです。

エリフは、神様を信じ従う人の苦しみに、神様から語りかけの時であると言うのです。神様は苦しみを通して、私たちに語りかけておられるのだと言うのです。22節には、「**見よ、神は力にすぐれておられる。神のような教師が、だれがいるだろうか**」とあります。神様は、私たちの教師であり、苦難という学校の中で、私たちに教え、訓練されると言うのです。15節には、こうあります。「**神は苦しむ人をその苦しみの中で助け出し、抑圧の中で彼らの耳を開かれる**」。神様は、苦しみの中でこそ、私たちに語りかけておられるのです。私たちは順風満帆の時は、

神様の御声を聞こうとしません。しかし私たちは、苦しみの時こそ、神様の御声に対して、耳が開かれるのです。私たちは、苦しみの時こそ、自分の耳を開いて、神様の語りかけをよく聞かなければなりません。神様は、この試練を通して、私たちに何を語ろうとしておられるのか、何を教えようとしておられるのか、耳を開いて聞かなければなりません。試練の時こそ、聖書の御言葉を読み、神様の語りかけに対して耳を開かなければなりません。

33 節には、「**その雷鳴は、神について告げ、家畜もまた、起こることについて告げる**」とあります。神様は、様々なものを通して、私たちに語りかけておられるのです。4 節には、「**知識の完全な方が、あなたのそばにおられるのだ**」とあります。苦しみの中で、教師である神様は、私たちのそばにおられ、私たちに語りかけておられます。神様は、「知識の完全な方」です。ですから、私たちに、23 節にあるように、神様に指図することも、神様を批判することもできません。私たちがすべきことは、24 節にあるように、ただ神様のみわざを覚えて賛美することだけです。

おわりに

私たちの人生にも、様々な苦しみがあります。イエス様を信じ従うクリスチャンにも、苦しみがあるのです。理由の分からない、なぜ私にこんなことが？と思えるような苦しみに遭うことがあるのです。どんなに正しく歩んできたと思っても、病気になったり、事故に遭ったり、家族に問題が起きたり、外からの様々な問題に巻き込まれたりするのです。

ヨブの三人の友人たちは、私たちの苦しみの原因を「因果応報」の原理で説明しようとしています。私たちの苦しみの原因は、私たちの罪にあり、私たちの苦しみは神様の裁きであると説明するのです。しかしヨブは納得できないのです。神様の贖いに信頼している自分が、罪によって神様に裁かれるなどあり得ないと考えたのです。私たちもそうです。パウロはこう言っています。「**今や、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません**」(ローマ 8:1)「**私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません**」(ローマ 8:39)。イエス様を信じる私たちは、イエス様の贖いによってすべての罪が赦されています。ですから、自分の罪が原因で、その裁きとして苦しみが起こるという事はあり得ないのです。イエス様を信じる私たちは、いつも神様の愛の中に生かされています。私たちの罪も、神様と私たちを引き離すことは決してできないのです。

では、私たちの苦しみの原因はどこにあるのでしょうか。エリフは、神様は苦しみを通して、私たちに語りかけておられる、苦しみを通して私たちの耳を開かれると言います。神様は、私たちの教師として、苦難という学校の中で私たちを教え、訓練されるというのです。

私たちの苦しみには、意味があるのです。神様の知らない苦しみはありません。神様は、苦しみを通して、私たちに何か語りかけておられるのかもしれませんが、何か教えようとしておられるのかもしれませんが、イエス様を信じる私たちは、たとえ苦しみの中でも、決して神様の愛を疑ってはなりません。私たちは苦しみの中でこそ、耳を開かなければなりません。私たちの教師であり、知識の完全な方は、いつも私たちのそばにおられるのです。

天におられる私たちの父なる神様。

あなたは天におられ、私たちの目には見えません。しかしあなたは全知全能の神です。私たちの人生に起こる痛みも、あなたの御手の中にあります。私たちには、その痛みの意味が分かりません。ただ分かることは、あなたが確かに私たちを愛しておられること、そしてあなたがその痛みを通して、私たちに語りかけ、何かを教えようとされていることです。

どうか痛みの中で、あなたを批判するのではなく、ただ賛美をすることができますように。あなたの語りかけに注意深く耳を傾けることができますように。

この祈りを、私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。